3 人間の偉大（いだい）と限界

▶ pp.91 ～ 93

ク・セ・ジュ —モンテーニュ

われわれ人間の言葉も，例によって弱点と欠陥（けっかん）をもっている。世の中の混乱の原因の大部分は言葉づかいに関するものである。……ピュロン派〔懐疑（かいぎ）論〕の哲学者が，自分らの一般概念（がいねん）をどのような言葉にも表すことができないのもこのためである。彼らには新しい言葉が必要なのである。われわれの言い方はすべて断定的な命題から成っているが，これが彼らにはまったく禁物なのである。だから彼らが「私は疑う」と言うと，人々は早速（さっそく）彼らの喉元（のどもと）をつかまえて，少なくとも，疑うというそのことを確信していることを認めさせようとする。そこで彼らは次のような薬の比喩（ひゆ）に逃げ込まざるをえなくなる。そうしないと彼らの考え方は説明がつかないからである。つまり，「私は知らない」とか，「私は疑わしく思う」とか言うときには，この命題そのものもほかのものと一緒に運び去られるのであって，ちょうど，大黄（だいおう）が悪い体液を体外に流しだすと同時に，自分も一緒に流しだされるのと同じだ，と言うのである。この思想は，私が天秤（てんびん）の銘に彫りつけたように，「私は何を知ろうか」という疑問のかたちで表せばいっそうはっきりする。

（モンテーニュ『エセー』（三）原二郎訳　岩波文庫）

幾何学的精神と繊細（せんさい）の精神 —パスカル

幾何学の心においては，原理は，明白であるが，通常の使用から遠ざかっている。従って，人はそのほうへ顔を向けようとおもわない。習慣がないからだ。しかし少しでもそのほうへ顔を向けるならば原理は十分に見える。人の眼を脱（のが）れることのほとんど不可能なほどに大きいこの原理の上で誤った推理をしようとするならば，全く不正確な頭脳をもつよりほかはあるまい。

しかし繊細の心においては，原理はすべての人の眼の前にある。顔を向けることは要らない，努力することも要らない。ただ，よい眼をもつ，それだけの問題なのだ。が，しかしよい眼は持たなければならない。なぜというのに，原理は，じつにこまかく，またじつに数が多くて，目を脱れずにいることは，ほとんど不可能なほどであるから。ところで原理が一つ欠けても人は誤謬（ごびゅう）に導かれる。そうであるから，あらゆる原理を見るために明らかな眼をもつこと，それから既知の原理の上で誤った推理をせぬために正確な頭脳をもつこと，これが必要である。

だから，幾何学者たちは，もしよい眼をもつならば，すべて繊細であるのだが，なぜなら彼らは彼らの知っている原理の上で誤った推理をしないであろうから。また繊細な人々は，もしその眼を幾何学の不慣れな原理に屈せしめることができるならば，幾何学者であるのだが。

（『パンセ』断章Ⅰ　津田穣訳　新潮文庫）

愛の秩序

いかなる物も，空も星も地もその王国も，精神的なるいかに小さなものにも値いしない，なぜなら精神的なるいかに小さなものもすべてそういう物質をおよび自己を意識するが，物質は少しも意識することがないからである。

あらゆる物質を合せても，あらゆる精神を合せても，それら精神のあらゆる所産を合せても，それは愛のどんな小さな動きにも値いしない。愛はさらに限りなく高い秩序のものである。

＊　＊　＊

あらゆる物質を合せても，そこからわずかの思考をも生ぜしめることはできない。それは不可能なことであり別の秩序に属することである。いかなる物質，いかなる精神を集めても，そこからまことの愛の一つの動きをも取り出すことはできない，それは不可能なことであり……別